

— 告 告 —

KIT
キャンパス
レポート ⑦
文・杉村裕之



小原 優斗 (こはら ゆうと)
金沢工業大学大学院工学研究科
バイオ・化学専攻
博士前期課程二年
三重県 高田高等学校出身

「KITで性根を叩き直せ」 高校担任の愛の鞭に覚醒。

私立進学校に入学したものの、宿題の期限を守るのは大の苦手だった。「そもそも、頑張っただけ強くなるタイプではなかったです」と、小原さんは振り返る。そんな彼の行く末を案じ、三年の担任は「レポートなどの提出物が多いKITで、その性根を叩き直してこい」と愛の鞭を入れた。

最初、入ったのは建築学科である。中学時代の職業体験で住宅の基礎工事を手伝い、「建築士っていいな」との淡い憧れがあったからだ。ルーズだった提出物と向き合うことも、キャンパスライフでの日課となった。「補習でカバーして進級できた高校とは緊張感が全然違いました。幸い、学びたいことをやっているので苦にはなりませんでした」。

この時、小原さんはひとつの殻を破ったのかもしれない。同時に、建築を学ぶ中で建築材、とりわけ無機材料への関心が強くなり、学部二年で大きな決断をした。応用化学科への転学科である。

「単位の取り直しや同じ学科の友達との別れ、授業についていけないかも不安でした」。揺れる狭間で、最後は自ら決めた道を信じて進むことにした。入学からわずか一年、彼を覆ってきた固い殻は粉々に砕け散っていた。

「頑張り屋で負けず嫌い。粘り強さもあって、後輩の面倒見もいんですよ」。これは、研究室で小原さんの指導にあたる岡田豪准教授の評だ。転学科した彼が、学びを掘り下げるテーマとして見つけたのが、非常口のサインなどで使われる蛍光体材料。岡田先生は蛍光体を用いた放射線計測の研究をメインに手がけ、より高感度な検出機能を備えた蛍光体の開発をめざし

ている。小原さんは「材料設計の自由度が高く、未解明の部分も多くて面白そう」と、立ち上げて早々の岡田研究室一期生となった。

現在、彼が取り組むのは、放射線の照射後、紫外線を当てると蛍光現象を発する「ラジオフォトルミネッセンス」の特性を探る研究である。昨年七月、苦労しながら英語で書いた論文が国際論文誌に掲載され、学会発表でも三度の受賞歴を持つ。来春からは、光学ガラスのバイオニアとして知る人ぞ知るオハラで、エンジニアとしての一歩を踏み出す。

意識の覚醒と、それを伸ばす環境の重要性。小原さんの話に、「人間が成長する条件とは」が説得力を持って迫ってきた。そして、彼をKITに送り出した恩師の慧眼。出会、いもまた大切である。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七-1
電話番号 076-248-1100